

武蔵野日曜集会

平安汝らに在れ

――ヨハネ伝第20章19～31節――

1985年4月7日

小池辰雄

平安なんじに在れ 三日月の満月 聖霊を受けよ 我のない無の世界に本当に入る わが主よ、わが神よ 見ずして信ずる者 恩恵と平安

【ヨハネ20・19～31】

19 この日、即ち一週のはじめの日の夕、弟子たちユダヤ人を懼るるに因りて居るところの戸を閉じおきしに、イエスキたり彼らの中に立ちて言いたもう『平安なんじらに在れ』²⁰ 斯く言いてその手と脅とを見せたもう、弟子たち主を見て喜べり。²¹ イエスマた言いたもう『平安なんじらに在れ、父の我を遣し給えるごとく、我も亦なんじらを遣す』²² 斯く言いて、息を吹きかけ言いたもう『聖霊を受けよ』²³ 汝ら誰の罪を赦すともその罪ゆるされ、誰の罪を留むるともその罪とどめらるべし』²⁴ イエス来り給いしとき、十二弟子の一人デドモと称うるトマスともに居らざりしかば、²⁵ 他の弟子これに言う『われら主を見たり』トマス言う『我はその手に釘の痕を見、わが指を釘の痕にさし入れ、わが手をその脅に差入るるにあらずば信ぜじ』

²⁶ 八日のうち弟子等また家におり、トマスも偕に居りて戸を閉じ置きしに、イエス来り、彼らの中に立ちて言いたもう『平安なんじらに在れ』²⁷ またトマスに言い給う『なんじの指をここに伸べて、わが手を見よ、汝の手をのべて、我が脅にさしいれよ、信ぜぬ者とならで信ずる者となれ』²⁸ トマス答えて言う『わが主よ、わが神よ』²⁹ イエス言い給う『なんじ我を見しによりて信じたり、見ずして信ずる者は幸福なり』

³⁰ この書に録さざる外の多くの徴を、イエス弟子たちの前にて行い給えり。³¹ されど此等の事を録ししは、汝等をしてイエスの神の子キリストたることを信ぜしめ、信じて御名により生命を得しめんが為なり。

●平安なんじに在れ

19 この日、即ち一週のはじめの日の夕、安息日ですね、これは。



弟子たちユダヤ人を懼るるに因りて居るところの戸を閉じおきしに、
キリストの味方をするやつは、ユダヤ人には敵だと思われるから。

イエスキタリ彼らの中に立ちて言いたもう『平安なんじらに在れ』

これは素晴らしい言葉ですね。「平安」というのは、ヘブライ語で「シャーローム」という。これは「こんにちは」でも「さようなら」でも何でもみんな「シャーローム」とユダヤ人は言うわけです。素晴らしいですね。私も手紙の封筒に「シャーローム」「平安」と書いてある。「シャーローム」というのはギリシア語では「アイレーネー」または「エイレーネー」というんですが、これはパウロが非常に使っている。「恩恵と平安」「カリス・カイ・アイレーネー」という言い方はしよつちゅう出てくる。

「平和」というのは、人間の間の交わりが平らかなことが「平和」です。この「シャーローム」という言葉はもともと「平安」という字です。「平安汝らに在れ」という、神さまと我々一人びとりとの関係、縦の関係です。縦の関係が立たなければ、横の関係は成り立たない。パウロがいつも言っているのは――「恩恵と平和」とは言つてやしない――「恩恵と平安」です。

「平安汝らに在れ」

と言う。キリストの言は空言ではない。実言ですから。実の言葉だから、これは必ず実現するんだ。実言は実に現ずる。空手形ではないですから。「平安汝らに在れ」と言われたときに、

「平安をお前たちにやるぞ」

ということです。

「なかなか平安がありません」

なんて答えたらダメだよ。

「平安をやるぞ」

と言われたら、

「はいっ、いただきます!」

と。それだけのなし。ヘブライ語では、「在れ」という言葉はない。いきなりただ、

「シャーローム・ラーケーム（平安汝らに）」

という。「汝に」と言うときは

「シャーローム・レカー（男性形）」

または

「シャーローム・ラーク（女性形）」

という。「平安汝らに在れ」は、もちろん我々一人びとりに「汝に在れ」と言うわけです。キリストは十把一絡げに仰つても、一人びとりをちゃんとキリストの側では意識しておられる。個というものを非常に重んずる。個が重んぜられないところには本当の全はない。



多もない。個が重んぜられない多なんてのは雑多な多だ。個即全、個即多という。だから、「汝らに在れ」は、「汝に在れ」という言葉がその奥にあるわけだ。それからまた、個が全体を代表する場合がある。「アブラハム」と言ったときに、「アブラハム族」のことを全部ひくめることができる。

●三日月の満月

哲学的にいうと、部分は全体を持つんです。そういう部分が本当の部分なんです。部分が全体を持つという。制限されたこの空間は無限の空間を持っているということなんです。これは連らなっているからね。我々は小さな有限体だけれども、我々ミクロコスモスがマクロコスモスを持っている。小宇宙が大宇宙を持っている。ゲートなんていうのはそういう気持の人物です。我々は大宇宙を表現している。我々の信仰はそれだけのもの凄さを持っている。

だから、未完成の完成ということなんです。三日月の満月ということ。三日月でありながら、これは満つる月だから、必ず満月を含んでいる。やがて満月となる。満月が約束されている三日月である。あなた方の一人びとりが全集会を背負っている。全集会を持っている。一人びとりが全集会を代表しているということです。そういう個が本当の個です。そういう部分が全体を持つような、三日月が満月を持っているような、そういう個というものはどうしてあり得るかという、これは聖霊が来なければダメです。

だから、「平安汝らに在れ」と言つて、

20 斯く言いてその手と脅^{わき}とを見せたもう、弟子たち主を見て喜べり。

「私は幽霊ではない。本当だ」と。霊体にもその傷跡がちゃんと見えている。

21 イエスまた言いたもう『平安なんじらに在れ、父の我を遣^{つか}し給えるごとく、

我も亦なんじらを遣す』

我々は遣わされたる者。私たちは使徒なんです。使徒的信仰というのは、遣わされたるもの。私は、「使徒的」ということは無教会でほとんど聞かなかった。無教会の先生方は預言者が好きなんだ。けれども、「使徒的」という言葉がなぜ、あれだけ使われなかったということは結局、聖霊の本当の体験をはつきりと意識していらないから、「使徒」という言葉が非常に少ない。使徒行伝の講義はほとんどない。藤井先生が

「使徒行伝はあまり好きではない。あれは行為の世界で、信仰の世界と少し違う」

というようなことを僕に言ったから、「これはこれは」と思った。なにも藤井先生の悪口を言っているわけではないけれども、歴史的にはどうしたって、我々はその前進行なければダメですよ。それを私が前進すれば、

「あれは無教会の信仰からズレた」

なんて、何を言っているか。ズレたのではない。前進したんだ。無教会は堅くて、気の毒



でしょうがない。

●聖霊を受けよ

「平安汝らに在れ」というキリストの言葉は本当に、

「平安汝に在れ」

とこれを聞いてくださいよ。

「マリヤよ、平安汝に在れ」

と、さっきの「マリヤよ」にも、もうひとつ加えたらいい。

キリストとの関係が正しく、あつく、切っても切れない関係にあることが「平安」なんです。だから、平安の主体はキリストです。もうひとついえば、平安の主体は聖霊なんです。

「平安汝に与う」

ということとは、

「平安の霊、聖霊を汝に与う」

ということになる。誰も言わんよ、そんなことは無教会では。

²²斯く言いて、息を吹きかけ言いたもう『聖霊を受けよ』

どうですか。「平安汝に在れ」と言ったあとで何を仰ったかというところ、

「聖霊を受けよ」

なんだ。しかも、復活のキリストが具体的に息を吹きかけた。素晴らしいところです。これはもう十字架を通っているから、キリストはこう仰ったんです。

けれども、彼らはまだ準備が足りない。祈りの態勢が。それでペンテコステで本当のところになる。けれども、ここで本当に聖霊を受けたら、ひっくり返るよ。ぶつ倒れてしまう。聖霊のバプテスマを受けるわけだ。

²³汝ら誰の罪を赦すともその罪ゆるされ、誰の罪を留むるともその罪とどめらるべし』

というのは聖霊の権威なんです。聖霊の権威なくしてこんなことをうつかりやろうものなら、とんでもない傲慢になる。

「本当の審判は君たちができるんだよ」

と言う。主観で審判なんかしたらダメだ、いわゆる批判なんかしたら。

「天国の鍵を与える」

とペテロに仰ったけれども、それと同じことです。

「平安の霊、聖霊を汝らに与う」

と。そこで、「平安汝に在れ」ということが具体的に、このキリストの言葉の直下にすぐその世界に入る。こういう聖書を自分でじっくりと黙って祈り心で読んで――その中に読み入るんだ――読み入ると、それでもうはつきりとその世界に入る。へたすると異言が出るよ。



そういう読み方をしてください。私はあなた方を本当にそういう意味で一人びとりを哀惜しているわけです。

●我のない無の世界に本当に入る

²⁴イエス来り給いしとき、十二弟子の一人デドモと称うるトマスともに居らざりしかば、²⁵他の弟子これに言う『われら主を見たり』

本当に見たから驚いたんだ。

トマス言う『我はその手に釘の痕を見、わが指を釘の痕にさし入れ、わが手をその脅^{わき}に差入るるにあらざれば信ぜじ』

このトマスというのは疑い深いやつだ。キリストは槍で刺されたから、穴が開いているかどうか見たいなんて。まあしかし、よくこういうことを言ったものだね。正直だよ。

²⁶八日ののち弟子等また家におり、トマスも偕に居りて戸を閉じ置きしに、

イエス来り、

戸を閉じていたのにキリストは入って来ましたよ。これは大変なことだ。霊体^霊というのは、幽霊でなくて、戸を閉じていたって入ってくるんだ。これはX線よりか凄い。もうこういう次元になったら、ルカ伝ではどうですか、それが入って来て、お魚を食べたではないですか。大変なことだよ。いくらなんだって、聖書にはいい加減なことは書いてないんだからね。ルカ伝の後の方には、

「何かあるか。食べてやるよ」

という問答がある。我々はもう降参するよりかしようがないじゃないですか、

「参りました!」

と。

「これは果たして本当か。これは宗教的物語ではないか?」

なんて、大抵みんなそう思っているんですよ、物語だと。これは物語ではないよ、現実なんだ。うつつなんだ。

私たちは本当に祈り入って、我のない無の世界に本当に入ってごらん。もの凄い力があるから。なんだかもう表現できないところにくる。私は今度の詩はそういう霊的次元でもって祈りながら書いている。それはその次元ではダンテにもゲーテにも負けませんよ。彼らは偉大な詩人だから、詩としてどれだけ私がそれにマッチするかは別問題だけれども。

●わが主よ、わが神よ

イエス来り、彼らの中に立ちて言いたもう『平安なんじらに在れ』

もう何回も仰っている。「シャーローム・ラーケーム」と。

²⁷またトマスに言い給う『なんじの指をここに伸べて、わが手を見よ、汝の



手をのべて、我が脅にさしいれよ、信ぜぬ者とならで信ずる者となれ』

トマスは参ってしまったね、これは。霊体のキリストがちゃんとその贖いの現実をそのまま遺しているわけだ。(ある患者の病室に現れた紫の衣の霊の話省略)

²⁸トマス答えて言う『わが主よ、わが神よ』

それでトマスは参ったものだから、

「わが主よ、わが神よ」

と。これは、

「参りました!」

という言葉だ。

「わが主よ、わが神よ!」

というこの表現が出るまでは、信仰の世界は本当にならないわけです。三人称で、

「これはどうもキリストらしい」

なんていうのでは。「わが主、わが神」と言って呼びかけるまでは本当の信仰の世界に入れない。

「キリストは神だったな」

なんて、そんなことではダメだ、「わが主よ、わが神よ」でなければ。「ラボニ!」というさつきの「わが先生!」というのと同じだ。

この「わが主よ、わが神よ」はいいね。本当に、トマスは参ったから。この正直者は参ったから、また本当に正直な告白をしました。さつきの、

「マリヤよ!」

「ラボニ!」

「平安なんじに在れ」

「聖霊を受けよ」

「わが主よ、わが神よ」

ここらの言葉が全部、我々が今日読んでいるところのキーポイントです。大事なものは本当に簡単なんだ。そういうところはちゃんと赤い線でも、黄色の線でもいいから引つ張っておいてくださいよ。聖書をパラパラと見たときにパツと来なくては。

「あ、それがそうだ」

と。

「どこだったけ?」

なんて、グルグル回したってダメだ。あなた方の聖書は自分の生命の延長と思わなくては。

●見ずして信ずる者

²⁹イエス言い給う『なんじ我を見しによりて信じたり、見ずして信ずる者は



幸福なり』

「見ずして信する者」

とはどういうことかという、見ないで霊の目で見る人です。霊視するんです。

「ま、分らないけれども、信じておこう」

なんていうのではない。霊視することは、根源現実を見ているんですよ。

だから、それが現象として本当に現れてくることはまた別問題です。そういうこともありまよ、もちろん。けれども、根源現実を霊の目でもってハッと見ている世界です。

それは本当は、見入るんです。見入る世界。信じ入る世界。信入る世界。全部、「入る」という言葉を私は何にでも使いたいわけです。中に入らなければダメなんだ、外から見ているのでは。内観するわけだ。内側から見る。それが一如の世界なんです。もうそうしたら、本当の平安ですから。言いようがないよ、私は。自分なんかどこかへ行ってしまうている。そんな言い方すると、

「どこかへ行った者が見えるか？」

なんて。

「バカ、そんな論理をしよつちゅう考えているからダメだ」と言っているんだ。

無なる者が本当は見入るんです、無限無量なものを。空気は我々の目では見えない。この目で見えない空気が見えるような世界に入らなければダメなんです。私は空気を見ようとすると、A君の顔が見える。これはしようがない。間が見えないんだ。見えないけれども、しかし、A君と私の間の空気が見えるような見方をしなければいかんということだ。私はそういう現の世界でなければやりきれないんです、私という人間は。現の世界でないとは、幻ではない。だから、信即現なんです。信することが直ちに現実なんです。だから、

「信じて、見る者は幸いなり」

ということ。

「信じ見る者は幸いなり。信じ聞く者は幸いなり」

と。ベートーベンなんかは目で聞いているんだよ。大体、音が聞こえないのに作曲ができるんだから大変なもんだ。全部、魂の耳でグーツと聞こえている。コンダクターなんてのはみんなそうでしょうね、楽譜を見ていて。

●恩恵と平安

30 この書に録さるる外の多くの徴を、イエス弟子たちの前にて行い給えり。 31

されど此等の事を録ししは、汝等をしてイエスの神の子キリストたることを信ぜしめ、信じて御名により生命を得しめんが為なり。

「シャーローム・レカー」(男性形)



「シャーローム・ラーク」(女性形)

「平安なんじに在れ」

ということ。「恩恵^{めぐみ}と平安」という言葉がパウロの書簡にはしょっちゅう出てきますが、恩恵を受けると同時に平安なんです。「恩恵と平安」なんて二つで言っているけれども、本当にキリストという恵みをいただければ、直ちに平安なんです。「恵み」とは聖霊が恵みであって、「賜物^{たまもの}」は恵みではない。賜物は賜物。「恵み」「カリス」という言葉は狭い意味では「聖霊」に対して使う言葉です。

「聖霊は一つで賜物はたくさんだ」

と言うときに、ドイツ語でいうと、「ガーベ」(与えられたもの)というのは聖霊に関してです。

「平安」という言葉がいかに力強い言葉であるか。ただ、「安らか」というのではない。平安には力がある。大体、「シャーローム」という言葉が一番先に出てきたのは土師記6章です。22節、ギデオンがミデアンとの戦いで神さまの力をいただくところです。

「²²ギデオン是において彼がエホバの使者なりしを覚り、ギデオンいいけるは、ああ神エホバよ我面^{おもて}を合せてエホバの使者を見ればはた如何せん。²³エホバ之にいいたまいは、心安かれ

これが「シャーローム」なんです。

怖るる勿れ、汝死ぬることあらじ。²⁴ここにおいてギデオン彼所^{かしこ}にエホバの

ために祭壇を築き之をエホバシャロームと名づけた。

「エホバシャローム」とは「平安の神」ということです。

是は今日に至るまでアビエゼル人のオフラに存^{ぞこ}る。」(土師記6・22～24)

これが「シャーローム」という言葉の一番先に出てきたところなので、こういう言葉を発したのは、このギデオンに神さまの力がきて、火がくだった。そういうところから来ている「シャーローム」という言葉です。

「心安かれ、懼るるなかれ」

はキリストがこの言葉をすぐ使った。海を渡ってきたときに、ペテロに向かって言った。

もう皆さん本当に、何が来てもヘコたれないですよ。

「ちよつとスランプだ。調子が悪い」

なんて、そんなことは言いつこなした。自分がダメだからこそ、キリストが来るんじゃないですか。ダメでなければキリストは来ないよ。ありがたい。そうすると、

「0＝∞」(無即無限無量)

式なことになりますから。行き詰まりを知らない者がクリスチャンというんです。自分に凝り固まっているのが、これが無教会という。勝手にしやがれ。情けないよ。いいよ、私はいくらでも一人で戦うから。あなた方、頼もしい方々がたくさんいらっしゃるので、非常にうれしい。キリストに在って我々は本当に楽しい自由自在な交わりの世界です。

